

振りつけることになりました。Rだけがこの表に貼ることが出来なかつたら困るだろうと思つた私は、是が非でも自分の顔を描かせなければならぬと、無理にクレオンを持たせ、その手を握つて自画像を描かせてしまいました。これはあまり芳しいやり方とは思えませんが結果としては決していけなかつたとは申せませんでした。なぜならこのことがきっかけとなつて、Rの傾向を知ることが出来るようになったからです。彼はたいへん自尊心が強く、自分に経験のないこと、自信のないことはしようとしなかつたのです。幼稚園の生活の中にある出来事がすべて驚きであり、他の幼児や私たちのおこなうこと、言うことを実にこまかく見聞きしておりました。動物や植物にも深い関心を寄せておつたことがわかりました。

A子はどうみても平凡な自立しない存在の女の子でした。温和でそれ以上こうといつた長所もなく運動能力が少々劣つているのが目立つほどでした。どこかによいところはないかとみているうちに、美しいものを好み、素直に喜びとし、思い出の深いことがわかつてきました。感謝祭に集められた果物や野菜を養護所に届け、幸薄い子らのことを報告すると、A子は深く心に感じて早速両親に伝え、遂にクリスマスには両親をして養護所の子らにたくさんのおやつを贈らせることになりました。知的な面では特に目立つことはなくとも、たくさんの使用人のある中に傲ることなく、弟妹に髪をひっぱられても、がまんして己の分を黙々として守るA子のこの特性は損われてはならないと思います。

個性に応じた教育ということ、教育者である私たちの側からも考えられることであります。私たちはその欠けている点をきびしく自覚して向上を計ることは大切なことです。保育者の偏つた能力は今、ここにある幼児に現実に反映することも否めないことです。一人の先生の偏つた傾向が強く反映するのは好ましいことではありません。同じ園の先生がお互の個性と能力を理解して助け合い、欠けたことを補い合いながら、巾の広い影響を与えることはたいへんによいことであると思われまふ。私たちは二十数年後の成人の理想像を胸に描きながら伸び伸びと育ちゆく幼な児らの育くみの助け手になりたいものと思ひます。

(山形)

めだか随筆

私のメモノートより

白 杵 田 穂

始発駅で発車の合図を待つガラシとした電車に、若い母親が「一人で乗ろう」とい

っている三才ぐらいの女の子を小脇に抱え込むようにして乗つて来た。母はずぐ席に

腰かけて子どもを膝にのせた。しかし女の子は膝から滑り抜けて車内の床に座りこみ母の手をもぎ取ろうとしながら、「一人で乗るう」と泣き出す。とうとう母親は根氣負けして、「そんなら一人で乗りなさい」と一度降ろして手を離す。子どもは段のところを全身の力でよじ登り車内に上り切った。そして其の時の表情の楽しさは何ともいわれなかった。

このようなこの世に生まれ出て三年しか送らぬ幼児でも、早や個性がはつきり出ている。まして四、五才の間におのおの違った環境によって性格づけられて来た幼児は、それぞれの個性の芽生えを持って、はじめの集団生活の場である幼稚園に入るのである。その集団が教師一人対四十五名であるから、まず社会生活に適応出来ない幼児から早く適応するように努力を尽さねばならない。同時に最初の集団生活に早くもボスの存在になりつつある幼児の指導も必要になってくる。しかし指導の方法はそれぞれ個性などに応じて異ならねばならない。

それらの正反対の非社会的個性の持ち主の指導が大体落ちつく頃、その中の中間に位置する目立たないし、他の者に迷惑をかける、しかしおのおの違った個性を持っている幼児たちが明確になってくるのである。その目立たないが何らかの指導の必要のある点を持っている幼児たちを個性に応じていかに指導してゆくかを考えると、なかなか気を休める暇もない。でも教師にとっては大切な仕事なのである。自由遊びの時または集団で仕事をする時、もう少し人数が少ないならとつくづく思うことがある。個性に応じた指導をするには、贅沢かもしれないが、あまりにも人数が多過ぎる。十一面観音や千手観音がうらやましいと思ふ時もあるくらいである。

H子は理解力はあるが気の小さいところがあり、すぐ涙ぐむ。ある時自由あそびで絵を書きながら、急に、その子には珍しい大きい声を上げて泣きはじめた。そばに行き、どうしたかと尋ねるが、しばらくはただ泣くばかりである。廻りの子どもたちもびっくりして見ている。私はそばの子ども

の椅子に腰かけ、また改めて尋ねると、「お母さんがよそに連れて行くから幼稚園に迎えに来るまで待っていなさい」といったけどまだ迎えに来ない」と泣きながらいう。母が自分を置いてきぼりにして行ってしまったと思ひこんだらしい。私が、母が来ると思ったかと念を押すと、はつきりうなずく。

その間もぼろぼろ涙が頬を流れていく。私はゆっくり話した。「お母さんはけっして嘘をつかない。お母さんはあなたの幼稚園に行つたあと、妹さんの顔も拭いてやらなければならぬ。掃除もしなくてはならぬ。泥棒が入らないように鍵もかけてなくてはならない。鶏もいるから餌もやらなくてはならない。それだから幼稚園にすぐは迎えに来られない。」と話すと、泣きながら聞いていたH子は、「お母さんはお茶碗も洗ってくる」とすすり上げて付け足す。「そう、それだからもう少し待っていなさい。きつといらっしゃるから」といったので、すっかり納得したようので、母親が来るまで朗らかに遊んでいた。

R児は兄に比べると、正反対の性格で、

表紙絵のこと

黒崎 義介

山形の友人の女の子で、五才のとき父親と遊びに来て、何が気に入ったかそのままいつき、幼稚園もうちからで、朝小さい友だちと手をつなぎ、スキップしながら小鳥が囀るよう園にいく姿は、まるで花びらが散ってるようで、いつまでも門のところまで手をふったものだ。

一年の入学で母親につれられて山形へ帰ってからの淋しさは、今でも辛かったことを忘れない。

二年生になる時、本人の意志でこちらの学校へあがるからお迎えにきて、というたどたどしいハガキをもらって、夫婦して鳥が飛び立つ思いで迎えに行ったものだ。

もう小学四年で大きくなったけれど、この子とある限り世の幸せを感じ、幼い頃の姿が今でも私の絵にいつも浮かんでくる。表紙の子どもも、その頃のこの子の姿です。

何をするにもあきやすく、衝動的で乱暴なところがある。友だちが訴えに来る相手は、八割までがRの名を持って来る。友だちの好き嫌いの調査結果も、A級の嫌われ者となっている。兄弟三人のまん中で、下の弟はまだ赤ん坊である。母は手の離せない状態で、愛情が行き届いていないようだ。Rの唯一のお得意は鉄棒である。それを知っているの、何回まわられるか皆と一しょに数えてやると、十八回続けて回転して、まだやろうとしている。その意気込みは、何か心のうっ憤を回転しながら発散させようとしているように感じた。それからはときどき思う存分Rに鉄棒をやらせることにしている。その時ばかりは、自信たっぷり、楽しんでそうに見え、だんだん手荒いことをやる回数も減ってきた。

これらの諸性格の集合体である組の幼児たちは、幼いなりに自分の考え方を持ち意見を持っている。そして、それは自分の個性を通した見方、考え方である。ラジオのお話出てこいを聞いても、童話を聞いても、話の途中で、「こんなにしたらいいのに」

「あんなにした方がいいよ」とささやきながら聞いている。それで童話をする時、私は、趣意を逃さぬように留意しつつ、幼児たちのささやき、つぶやきなどなるたけ多く捉え、それを話の中にそっと織り込むことにした。そうすると幼児たちは、自分の考えていることが、話の主人公なり、その登場する事物に移行しているのを知って満足そうな顔をしている。そのように童話を媒介として、幼児それぞれの個性を通した考えを取り入れつつ、筋(プロット)を成長させていくように、私は今試みていく。

とにかく個性芽生えの時であり、好ましい個性をのばす可能性もっている幼児たちが、よりよき将来を獲得出来るよう、そして、より優れた社会生活が営まれるよう、親も、教師も、其の他の人びとも、正しい愛情をそそぎながら育ててゆかねばならない。(熊本)